

するようになったのだ。こんなことは歴史上、世界のどこを見てもかつてなかったことだ。人々は、自分の個人情報だけでなく公開されているか気づいていなかった——罪のない人々も、罪のある連中もそれは同じだ。

当時のぼくは三〇代前半、よくいるパソコンが趣味の会社員だった。仕事が面白くなくて、関心があるのはニュースだった。そんなある日、とつぜんひらめいた。ネットで検索すれば、マスコミも専門家もまだ知らない事実を発見できるのではなからうか。同じことを思いつく人間はほかにもいて、ネットのコミュニティが自然に形成されていった。(ユーチューブ)や(フェイスブック)、(ツイッター)などなどに手がかりが残っている、そんな事件や事故に引き寄せられて集まってきたわけだ。経験を積むにつれ、手法は洗練されていった。最新の調査手法を教えあい、ああでもないこうでもないやっているとやっているうちに、しだいに形が整ってきてひとつの新しい分野が生まれ、ジャーナリズムと人権活動と犯罪捜査が結びつくことになったのだ。

ぼくたちはこれまで、シリアの独裁者バッシュアール・アル・アサドが自国民に化学兵器を使用したという証拠を発見した。(マレーシア航空17便)撃墜の黒幕をあばいた。ヨーロッパに潜む(ISIS)シンパの居所を突き止めた。ヴァージニア州シャーロットツヴィルじゅうを荒らしまわっていた、ネオナチ集団の身元を明らかにした。新型コロナウイルスとともに広がった、偽情報の洪水を食い止めるのに手を貸した。そして、クレムリンの「暗殺班」の正体も暴露したというわけだ。

これはまったく新しい分野だから、決まった名称がまだない。いちばん一般的なのは「OSINT」^ト「open-source intelligence (オープンソース諜報活動)」の略だ。ただ、この略語は政府の諜報

活動に由来するものであり、とうぜん秘密主義的な活動だから、公開と共有を重視する(ベリリングキヤット)のやりかたとはそぐわない。「オンライン・オープンソース調査」のほうがもっと近い、もっと正確な表現だ。とはいえ、ぼくたちのやっていることはたんなるインターネットの調査ではなく、もっとさまざまなことをやっている。偽情報で社会を歪めようとする勢力と闘い、あくまで証拠にこだわり、そしてふつうの市民がどうやって悪事を暴露し、権力者に説明責任を果たさせるにはどうしたらいいか、身をもって実例を示している。

民間の調査員マイケル・バゼル——オープンソース調査法の導師だ——は、かつてはFBIで犯罪者を追うためにデータベースをあさっていたが、当時それにはたいへん経費がかかったため、しろうとには手が出せなかった。「しかし今日のOSINTなら、ある人物について知りたいことがあれば、おそらく九八パーセント以上の情報は無料で手に入るでしょう。わたしがOSINTの側に本気で飛び込んだのはそのためです」と彼は言っている。「これならだれにでもできると、はたと気がついたのだ」^ト。

マイケル・フリン将軍は、アメリカ国防情報局の局長だったとき(トランプ政権に入って体面を失う前の話)、かつて貴重な情報の九〇パーセントは秘密の情報源から得ていたが、ソーシャルメディアの登場以後はそれが逆になったと言っている。価値ある情報の九〇パーセントは、だれでも見られるオープンソースから得られるようになったというのだ^ト。

諜報機関は、以前からオープンソースの情報を収集していた。新聞をなめるように読んだり、ラジオ放送を聴いたり。しかし、そういう情報は軽視されがちで、秘密の情報源が好まれた。そのほ

13 エリョット・ヒギンズ著 安原和貞訳
「ベリリングキヤット—デジタルハンター—」

国家の嘘を暴く (筑摩書房、
2022年3月)

ミサイル四基の砲台だ。車両のなかには軍用航空機を狙うためのレーダーが備わっている。つまりこれは地対空ミサイルの発射装置であり、その利点は機動性にある。発射したあと、走ってその場を去ることができるわけだ。

これが証明されれば——そういう高度な兵器が、攻撃のあった日にその制圧地域をほんとうに走っていたのなら、親ロシア派の反乱軍には、巡航高度を飛ぶ旅客機を撃ち落とす能力があったことになる。いわゆる「犯行に使われた兵器」を映したこの三五秒の動画を、ほくは即座に自分のパソコンにダウンロードした。ソーシャルメディアでは、重要な証拠がひょっこり現われてはすぐに消えてしまうことがとても多い。そのことはシリア内戦の調査で経験してわかっていった。思ったとおりだった。数分後、オリジナルの〈ブーク〉動画は削除された。とはいえ問題はそのままだ。ここに映っている町はほんとうにスニジネなのか。ジオロケーション法を実行するため、動画内の目印になる特徴を探した。道路は二車線で、中央分離帯には木が植えてある。スニジネの衛星画像では、このような道路や樹木はあまり見当たらないようだった。とはいえ大きな都市だし、曲がりくねった道路などいくらでもある。ほかの探偵に協力してもらおうと、〈ツイッター〉にこの動画をあげてフォロワーと共有することにした。そして「この動画のジオロケーションに最初に成功した人に、金星のステッカー」と書いた。

七分後、最初の候補が送られてきた。数名のフォロワーが、スニジネ中心部の南側の地域ではないかと指摘してくれたのだ。たしかに二車線の道路があつて、中央分離帯の樹木の並びかたも同じで、動画と同じように少し曲がっている。地点を正確に特定するには、カメラがどこにあったのか

突き止める必要がある。それがわかったら、その視点から見たときの風景を逐一突き合わせていけばよい。動画は高所から撮ったらしく、道路を見おろす角度で撮影されていた。というわけで、ここでとくにお役立ちのアプリをロードした。〈グーグル・アース〉だ。このアプリでは、衛星画像と航空写真を継ぎ接ぎして地球の模型が作られており、ユーザーは好きな場所にズームインしたり、都市を丸ごと上下左右に傾けたりすることもできる。距離を測ることもできるし、時間を移動するスライダーを使えば、別の時期の衛星画像と比較することもできる——これは数か月前のグマスカスの地域を調査したときにわかったのだが、かつては賑わっていた場所が消えているのが確認できたりして、戦争の状況を追跡するさいには欠かせない機能だった。〈グーグル・アース〉のもうひとつの重要な機能は3Dビューだ。これを使うと、上空からの画像を傾けて地上からの視点に変え、地上から眺めるかのように風景を見られる。だから、ソーシャルメディアの画像に映っている、山や川といった背景のランドマークと一致するかどうか確認できるというわけだ。

今回〈グーグル・アース〉を使う目的は、〈ブーク〉動画の視点を再現することだった。つまり、撮影に使われた見晴らしのよい高い地点を突き止めるのだ。丘陵地は遠くにはしかないが、ほかの高所を見つけた。高層アパートだ。これをカメラの位置として試してみると、動画と同じランドマークが確認できた。特徴的な三本の木、交差点、家の赤い屋根。よし、一致した。〈ブーク〉ミサイル発射機は、スニジネを離れてここから南へ向かっていったのだ。

しかし、急ごしらえのネット協力チームとぼくとで証明できたことはごくわずかだった。旅客機を撃ち落としたのが〈ブーク〉なのかまだわからないし、まして動画のこの〈ブーク〉がしたこと

れに対しては懸念の声もあがった。いくら唾棄すべき意見の持主だとしても、政治集会に参加したというだけで「さらす」のはどうかというものだ。(ベリングキャット)がその気でやれば、オルタナ右翼のデモ参加者全員を特定することも不可能ではないと思うが、そんなことをするつもりはない。ほくたちの行動規範の中核にあるのは、調査対象は重大な罪を犯したと思われる人間か、あるいは公的な権力をもつ地位にありながら、犯罪行為に手を染めようとしている人物か、という問いかけだ。初期の(ブラウン・モーゼス)時代に電話盗聴スキヤンダルを扱ったとき、破廉恥なマスコミの行動を目の当たりにして、あんなことはするまいとほくは肝に銘じた。つまり、たまたまその場にいただけ、問題の人物といっしょにいただけの人を、責めたてたりつるし上げたりするのはやめようということだ。ウクライナの情報戦士たちはオープンソース調査の手法を用いて、親ロシアの分離独立派とたまさか接触があっただけの人や、ロシア政府について好意的な記事を書くジャーナリストなどを、望ましからざる人間のリストにあげている。(ベリングキャット)はそんな手法はとらない。たとえば、スクリパリ父娘暗殺計画に加わったGRUのエージェントについて調べたときのこと。彼の上官には娘がいて、その結婚式の写真がソーシャルメディアにアップされていた。式ではエージェントの若い娘が花娘(結婚式で花嫁の前を歩いて花を撒く少女のこと)を務めており、これは彼が上官と親しい関係にあることを証明するのに役立つ情報だったが、ほくたちはその子の画像はいっさい使わなかった。(ベリングキャット)が求めるのは説明責任であり、当局が対処できずにいる場合はとくにそうだ。シャールロッツヴィルの事例では、その点でためらいはなかった。特定しようとしているのは暴力犯罪の容疑者なのだから。

アリックは、ラリーには友人と連れだって行く者が多いという仮説に基づいて調査を進めた。(ベリングキャット)が第53旅団の将校を特定するさい、兵士たちのソーシャルメディアの投稿を利用したのと同様に、容疑者のそばに写っている男ふたりの痕跡をネットでたどる。(フェイスブック)で「ジェイコブ デイクス センターヴィル」を検索すると、金髪でスポーツマンタイプの若い男のプロフィールが見つかった。そのアカウントで投稿されている公開写真は、たいまつ行列の写真で容疑者の右側に写っている男と明らかに一致していた。アリックは次に、「ライアン マーティン センターヴィル」で検索し、ずんぐり型でダークヘア、やぎひげを生やして首にタトゥーを入れた若い男を見つけた。これは行列で容疑者の左側にいた男と合致する。ライアン・マーティンの(フェイスブック)のプロフィールでは、友達リストは非公開になっていたが、ジェイコブ・デイクスのほうはさほどプライバシーにこだわっていなかった。友達リストにはライアン・マーティンのほか、例の容疑者によく似たプロフィール写真の若い男が入っていて、オハイオ州メイスンの「ダン・ボック・ボーデン(ビッグラビット)」と名前があがっていた。そこでボーデンが「いいね」をつけたページのリストをチェックすると、(男権運動の宇宙)、(フェミニズムは悪)、それにケキスタン(政治的公正を嘲弄するためにネット上に作られた架空の国で、国章はナチの軍旗に基づいている)があつた。ボーデンの友達リストにはデイクスとマーティンの名もあつた。

アリックはボーデンの公開している写真を調べ、ヘルメットをかぶつた容疑者の写真と対照しやすしい画像を探した。それほど探しまわる必要はなかった——(フェイスブック)のプロフィール写

影を測定して時刻を判定することもしなかった。ソーシャルメディアで、ファシストたちが互いにどんな話をしているのか解析するのが彼のやりかただった。その目標は、若者のサブカルチャーが掲示板でいかに先鋭化するかを解明し、過激な荒らしが仕掛ける情報のトラップに対し、メディアに注意を喚起することだ。ロバートの分析調査はその後、〈ベリリングキャット〉史上最もよく読まれたレポートとして結実することになる。

ぼくが〈サムシング・オーフル〉の掲示板に頻繁に出入りしていたころ、何時間もかけてネット上の画像にキャプションをつけたり、GIF動画を作ったりして仲間うちで面白がる、という風潮はすでにできあがっていた。やがて〈Tchan〉というもつと過激なフォーラムが生まれ、こういうミーム（ここでは「インターネット・ミーム」のこと。ネット上で流行する画像や表現などをさす）作りはそこへ場所を移し、若者特有の残酷さを反映して先鋭化していった。〈Tchan〉の党派——とくに「/pol/」の略称で知られる「政治的に不公正」板——は、ミーム作りの技能を利用して二〇一六年の大統領選でトランプを応援した。このプロジェクトは「大ミーム戦争」の名で呼ばれ、一般社会を揶揄する荒らし的ジョークと思って始める者が多かったものの、自分たちの及ぼす影響力にのめりこんでいく者もいた。この「戦争」の一環として、匿名の投稿でマンガのキャラクター「カエルのペペ」が使われて人気になっている。これはよく意味のわからないシンボルで、トランプを表わすこともあれば、オルタナ右翼とか白人ナショナリズムの象徴として使われることもあった。とくに人気のミームは〈フェイスブック〉に登場し、社会の多数派の目に触れることにもなった。

「反・事実コミュニティ」の場合と同じく、不健全な思想はネット上で同志を見いだし、強化されていった。ひとつ違うのは、一般の市民がアサドやブーチンをやみくもに信奉する場合、自分たちは世界のためにがんばっていると考える傾向にあるのに対し、「Achaner (Achan 住民)」はめったに世界の問題など気にしないということだ。〈Tchan〉には一種の皮肉なニヒリズムが蔓延している。その根っこにあるのは、この世は醜悪であり、人生に生きる価値はない、という考えかただ。どんな問題でも、まじめにとったりすればさんざん笑い物にされる——たとえ、鼻先に銃口を突きつけられていたとしてもだ。

ロバートは、ゲーム愛好者のチャット・アプリ〈デイスコード〉——ネオ・ファシストがはびこっていた——からリンクされた投稿をあさっていた。シャーロットツヴィル以後、オルタナ右翼には新たな分派が生じていた。たとえば〈プラウド・ボーイズ〉とか〈愛国者の祈り〉、〈反共産主義運動〉など、偏狭さを否定し、言論の自由や伝統的な価値の擁護者、過激な左翼に対する防波堤を自認するグループだ。しかし、その看板を真に受けるわけにはいかない。

リンクされた非公開の投稿を収集するうちに、ロバートは「戦闘力を隠す」〔マンガ『ドラゴンボール』に由来する表現。本来は「周囲から浮かないようにオタク趣味を隠す」などの意味で使われていた〕という語がときどき出てくるのに気づいた。これはつまり、一般社会から疎外されるのを防ぐために、自分たちの真の思想をごまかすということだ。「ナショナリスト党を作ろうじゃないか」と、〈アンチコミュニティ・アクション〉の創設者はメッセージのやりとりのなかで書いている。「軍事費の大幅アップと国境警備の強化を謳えば保守派を惹きつけられるし、科学助成金や宇宙探査を約束すれば〈レディット〉民から支持されるだろうし、国民皆保険を言えば左翼も乗ってくる。……戦闘力を隠すだ



画が出まわったのだ。これはディープでなく「浅い改竄」だ。つまり本物の動画にちょっと手を入れて加工したものであり、この例ではたんにスピードを落とし、声の高さを調整するだけで、ペロシが酔っているとか、頭がちゃんと働いていないという印象を与えているわけだ。こんな軽度の改竄がこれほど広範な反響を呼ぶとすれば、五年一〇年と経つうちにはどんなことが起こるか多くの人々が震えあがった。

画像の改竄には長い歴史がある。よく知られているのは、二〇世紀のソ連のプロパガンダだ。スターリンにいらまれた人物は監獄のなかへ姿を消し、すると記録写真のなかからも姿を消してしまつたのである。このような改竄には暗室の専門家が必要だったし、それを印刷・出版するよう圧力をかけなくてはならなかつた。だが今日では、技術的にずっと複雑な操作がスマートフォンでできるし、それを世界じゅうに広めるのも簡単だ。

「ディープフェイク」には動画しか含まれないわけではない。人工知能(AI)には、実在しない人間をでっちあげることもできる。ウェブサイト(どっちの顔が本物)はこれを実証するサイトで、コンピュータの生成した写真と本物の写真が並べて表示される。見分けるのはぞつとするほどむずかしい。また、音声版ディープフェイクはすでに悪用されている。スピーチのサンプルをもとにCEOの声を電子的に複製し、二二万ユーロを詐欺師の口座に至急振り込むよう部下に命じるという事件が起こっているのだ。イーロン・マスクの支援する研究開発会社(オープンAI)は、意味の通る文章を自分で生成できるアルゴリズムを作成し、「荒らし」を自動化する可能性を生み出した。たんにスパムを送るだけでなく、人々を焚きつけて対立を煽ったり、陰謀論を広めたり、意味の

ある議論を台無しにしたりできるといふのだ。濫用の懸念があるといふことで、(オープンAI)はこの研究を公表しないことにしたといふ。

ディープフェイクは脅威ではあるが、正しく知れば、心構えもできるし対策も打てる。過度に恐れるばかりではかえって破滅的な影響が生じ、どんな記録も真摯に受けとめられなくなる。なにも信じられないと主張されたら、どんなに確実なオープンソース調査も信用に値しないということになってしまう。これ以上に手つとり早い手段があるか。まちがいでなく、これはすぐに情報操作キヤンペーンでお定まりの戦術になっていくと思う。「でもディープフェイクでないとどうしてわかる?」と言って、シリアの動画をまともに取り合おうとしないツイートを、ぼくはすでに何度か目にしてている。まだそこまでのパワーはないのに、ちゃんと知らない人はこの技術を過大評価してしまいがちだ。

合成メディアとその濫用の危険に関する第一人者、人権団体(ウィットネス)のサム・グレゴリーは、この脅威に対してはまだ適切に対抗できる見込みがあると主張している。ネットの虚偽情報に直面したとき、近年社会がとってきた対応はあまり褒められたものではなかったが、それよりはうまくやれるはずというわけだ。まずはどのようなベテンが可能か理解しなくてはならない。動画から人物やモノを消すことはいまでも可能だ。動画内の天候を変化させることもできるし、「顔の入れ換え」や動作の編集によって、本物の人間の動画を人形劇に変換し、こちらの望むことを言わせたりやらせたりすることもできる。次に、「合成メディア」の及ぼす影響をよく考えなくてはならない。たとえばちゃんとした報道の信頼性を損ねるとか、政治家や市民団体のメンバーの